

研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダールの場合」
Research Project: Reception and creativity - The case of Stendhal in modern and
contemporary Japanese literature -

実施期間： 2009～2011 年度（3 年間）

Term of the Project: 2009-2011 fiscal years (3 years)

研究代表者： ジュリー ブロック 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

Project Leader: Dr. Julie BROCK, Professor, Kyôto Kôgeisen.i University

研究目的要旨：

近現代日本文学の作家たちは直接間接を問わず外国文学をまず受容することによってその仕事を開始した。とくにフランス文学の影響がこの点において顕著である。しかし日本文学が自立するためにはそこに独自の創造性を生み出さねばならなかった。この「日本的創造性」とは何か、本研究の目的はそのことを個々の作家に即して検討することにある。

研究目的：

①背景：

日本では、スタンダールが幾度かに渡り顕著に流行した時期がある。最近もまた『赤と黒』（野崎歓訳）により新たな流行の波が起きている。一方、スタンダールに深く傾倒していた大岡昇平は、2008年3月に『ながい旅』（1982）が映画化され（『明日への遺言』小泉堯史監督）、同年4月には『俘虜記』（1948）はフランス語で翻訳出版されたばかりである（*Journal d'un prisonnier de guerre, trad. François Compoin, Paris, Belin*）。私たちはこのような社会現象から受容・創造理論をあらたに立ち上げることを狙っている。

②必要性：

本研究は、フランス文学、とくにスタンダールの受容に影響された作家大岡昇平を取り上げる。その理由は、大岡がスタンダールの翻訳者、紹介者、研究者、すなわち「受容者」であっただけではなく、同時に偉大な小説家として活動していた点にある。その点で大岡は、受容と創造の関係性を比較文学的に解明するための大きなモデルとなる。

日本の作家たちは海外からの影響を受けながらも、そこに「日本的創造性」と呼べるものを生み出している。それは具体的に何であるのか。こうした問題は、本プロジェクトのなかで文学の受容-創造理論立ち上げることによって解明されるだろう。

③方針：

小説における創造性とはなにか。この問いに答えるために本研究会はマルク＝マチュー・ミンシュの「生きているという感覚」（Marc Mathieu Münch, *L'Effet de vie ou Le singulier de l'art littéraire, Paris, Honoré Champion, 2004*）の概念を借りる。フランス語でこれは「エフェ・ド・ヴィ」といわれているものであり、文学によって呼び起こされる気持ちや感覚の高揚を扱うための、これまでにない斬新な理論である（この高揚こそがエフェ・ド・ヴィであり、ミンチュによれば、時代や地域を問わずあらゆる文学作品の基礎となるものである）。そうした効果を生む表現は、作家が影響を受けた西洋の作品にも見られるとともに、何らかのかたちで、彼が自ら創作する日本語作品のなかにもあらわれる。その合致点を読み解きながら表現手法や方法論について探求し、新しい学術研究の芽を見つけ

出すことを願っている。

Objectives:

As far as we know at present, Stendhal's reception in Japan begins in 1900. Since that date, the works of Stendhal have been constantly translated, commented and re-published. Just very recently, *The Red and the Black* was re-published by Kôbunsha Publishing in a translation by Nozaki Kan. First issued in September 2007, this translation was re-printed for the third time in March 2008.

By taking Stendhal's reception as an example, and through the analysis of texts by Japanese authors, our study aims to clarify the part of creativity which shows through in Stendhal's reception. In Ôoka Shôhei's case, the question is particularly preponderant, for this great writer, well known for his works of fiction, his autobiography and his war chronicles, is also a Stendhal specialist having translated him and presented him to the Japanese public. By basing ourselves on the work he has done, as well as on previous research by Japanese admirers of Stendhal, we shall re-examine Stendhal's reception in Japan from the perspective of the creativity of Japanese authors in contact with this work of Western creation.

However, if foreign influences are more conscious, and thus easier to bring to light, other sources of influence come from Japanese literature. Aesthetic traditions, as well as the history of society, thought and culture, form a compost whose effect on creation in literature is not negligible. We shall draw on the pre-Meiji aspects of Japanese literature in order to highlight the specifically Japanese characteristics of works of Western inspiration.

Our study will lead us to ask the difficult question "What is literature?" To answer this question, we shall appeal to the concept of "Life effect" (Marc Mathieu Münch, *Effect of Life or The Singularity of Literature as Art*, Paris, Honoré Champion, 2004). In supposing that a "life effect" occurs in Japanese readers who come into contact with Western literature, we shall ask ourselves through which linguistic means, through which subtleties and through which turns of phrase Japanese authors have managed to produce an equivalent effect on their own readers. This question will, in particular, be at the centre of our thoughts about the translations. In the texts we analyse, we shall strive to search for examples which allow us to bring out the part that creativity plays in the translators' work.

Finally, it is our hypothesis that, even if the tastes, the preoccupations and the expectations of the reader are not the same in 1900, in 1945 or in 2008, there exists in Stendhal's work a principle of longevity that is perhaps in its very design. The way in which this work, in aiming to touch the reader in his intellect, as well as in his sensitivity and in his feeling of emotions, comes into the field described by Marc Mathieu Münch is perfect. It is from this point of view that we shall re-read the works of commentators and critics across the entire history of Stendhal's reception in Japan.

By examining the effects produced by Stendhal's work through the effects sought after by Japanese works, we shall ask ourselves whether "life effect" is truly the key to success in works of literature. Returning to the specific means used by Japanese authors to touch the reader and produce this "life effect", we shall strive to clarify the analyses theoretically, so as to give a substance to the concepts which allow us to account for our works in a way which is synthetic, and which opens the prospects of later research on the functions of literature, and its place in the field of research into human sciences.

キーワード: スタンダード受容、影響、創造性、真の生命感、大岡昇平、近現代日本文学、比較文学

Key Word: Stendhal's reception, Influences, Creativity, Ôoka Shôhei, Modern and contemporary literature, Comparative literature, Life effect, Marc-Mathieu Münch

参加研究者リスト: 16名 (◎研究代表者)

氏名	職名等
◎ジュリー ブロック	京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
相澤 伸依	東京経済大学経営学部専任講師
岩本 和子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
小野 潮	中央大学文学部教授
粕谷 祐己	金沢大学歴史言語文化学研究域教授
清水 孝純	九州大学名誉教授
杉本 圭子	明治学院大学文学部准教授
関塚 誠	群馬県立桐生南高校教諭
高木 信宏	九州大学大学院人文科学研究院准教授
辻原 登	東海大学文学部教授 (2009年度・2011年度参加)
中川 久定	京都大学名誉教授
野崎 歆	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授
福田 裕大	京都精華大学非常勤講師 (2010年度から参加)
星野 紘一郎	共立女子短期大学文科非常勤講師
松村 博史	近畿大学文芸学部准教授
山本 明美	神戸大学大学教育推進機構非常勤講師

研究活動実績:

2009年度:

2009年度は、三回の研究会を開催し、まずはじめの二回は日本でのスタンダード受容の分析に充てられた。第一回目の会では、世界におけるスタンダード受容について概観し、スタンダードの影響性を確かめた後、日本におけるスタンダード受容について概観しながら、多角的に議論を進めた。そのなかで、方法論上の問題として、マルク・マチュー・ミュンチュが言う「生の作用」理論を軸に据えることを提案した。第二回目のケース・スタディーにおいてはこの理論の応用が目指された。第三回目の研究会は大岡昇平を主たるテーマとして行われた。各回とも、様々な専門領域の優れた研究者たちが読書という現象に充てた文学研究の方法を提示している。研究会は全て日本語とフランス語で行われてきた。第三回研究会では、元NHKプロデューサーのドキュメンタリー作家を招き、彼が制作した大岡昇平に関するドキュメンタリーの抜粋を上映した。上映後のディスカッションにおいて、「エフェ・ド・ヴィ」が映像作品においても働くことを確認できた。すでにピーター・ラング出版社とのあいだでフランス語版の議事録の出版交渉が進められている。同じく日本語版の議事録出版のために、フランス国際交流基金に補助金を申請した。

研究会開催実績:

- 第1回: 2009年5月29日～30日 (於: 高等研)
- 第2回: 2009年11月13日～14日 (於: 高等研)
- 第3回: 2010年3月5日～3月6日 (於: 高等研)

話題提供者：8名

桜井 均	NHK放送文化研究所所員／立命館大学映像学部客員教授
西川 長夫	立命館大学名誉教授
花崎 育代	立命館大学文学部人文学科日本文学専攻教授
エリック・アヴォカ	京都大学文学研究科文学部外国人教師
ジャン・エレ	サクレ・クール大学ルクセンブルグ大公国准教授
フランソワ・ヴァヌストゥイーズ	パリ第3大学文学部准教授
フィリップ・ベルティエ	パリ第3大学教授
ミシェル・ド・ボワシュエ	岡山大学大学院社会文化科学研究科・文学部講師

2010年度：

2010年度は二回の研究会を開催した。まずはじめの研究会では、大岡昇平、上田敏、バルザック、ドストエフスキーの翻訳において「生の作用」がいかに関わっているかをみた。続く会では、「翻訳者の視点から」と題し、大岡昇平のフランス語訳、またシャトーブリアンとスタンダールの日本語訳、スタンダールのドイツ語訳に考察の目を向けた。この二回の会は「生の作用」の現象が具体的作品、翻訳のなかにいかに現れているかを問うたものである。こうした作業により、本研究の主軸となる理論である「生の作用」のはたらきが実践的な文学研究をなす中で確認され、よって日本文学研究においてマルク＝マチュー・ミュンシュの理論が実証され、かつ補強されたといえる。「受容から創造性へ」という本プロジェクトの骨子は固まったといえよう。コアメンバー、話題提供者に加え、何人かの翻訳者たちの参加を得たことも収穫である。イブ＝マリー・アリュー（中原中也のフランス語訳）、ブリジット・アリュー（小林一茶のフランス語訳）、コリーヌ・アトラン（村上春樹ほか多くの日本現代文学のフランス語訳）など、すべて小西財団翻訳部門の最優秀賞の受賞者たちである。こうした多彩参加者の間で、本プロジェクトはこれまで通り日仏両言語にて議論を深めてきた。

補足しておけば、本研究は内容面の水準を保ちつつ、出来る限り経費を削減するよう務めてきた。フランスから話題提供者を招聘する際、フランス大使館と協力（マルク＝マチュー・ミュンシュの場合）しプロジェクトからの出費を渡航費の面で半額に抑え、また日本在住のコアメンバーの三名が私費参加による協力を受諾、さらに外部からの研究会参加者にも私費での参加を要請するなど、高等研からの負担額を可能な限り抑えるべく務めている。

研究会開催実績：

第1回： 2010年7月2日～3日（於：高等研）
第2回： 2010年11月12日～13日（於：高等研）

話題提供者：4名

小川 紘子	元久留米信愛女学院短期大学助教授
マイケル・ジャコブ	グルノーブル大学比較文学研究科教授
ティエリ・マレー	学習院大学文学部教授
マルク＝マチュー・ミュンシュ	メス大学名誉教授

その他の参加者：6名

小川 紘子	元久留米信愛女学院短期大学助教授
コリーヌ・アトラン	職業翻訳家（文学作品を専門）
イブ＝マリー・アリュー	元トゥールーズ大学准教授
ブリジット・アリュー	元トゥールーズ大学講師

フィリップ・ジャンヴィエ＝カミヤマ フランス総領事
ミシェル・ド・ボワシュー 岡山大学大学院社会文化科学研究科講師

2011 年度：

当初第六回研究会は本年 6 月に予定されていたが、3 月に起こった出来事の影響で海外からの招聘者の渡航見送りが生じたために延期とし、代わって 12 月に、今年度に予定されていた二つの研究会を合併することで第六回研究会を開催した。同時にこの会はプロジェクト全体の結びともなるものであり、三年に渡って行ってきた研究の歩み全体をふりかえるために三日間にわたる濃密なプログラムをたてるとともに、「芸術学としての文学批評のために」という包括的なテーマのもとに進められた。「批評家、編纂者、出版社の視点」と題された第一日目には、まず、三日間の一般的な問題構制をフランソワ・ルセルクル先生による導入から確認したのちに、駒井稔と福田裕大により、受容という現象における編纂者、出版社、批評家の役割に関する発表がなされ、「読まれること」の条件について」という主題のもとに参加者間でディスカッションがなされた。二日目は、「文学、詩、音楽、絵画」と題して、二部構成で進められた。午前の部「読み手としてのスタンダード」では、ベアトリス・ディディエがモラリストの読み手としてのスタンダードについての研究成果が寄稿されたほか、粕谷雄一がスタンダードによるアラビア文学の受容について、山本明美がロラン夫人の『回想録』の読み手としてのスタンダードについて、それぞれ報告をなした。午後の部は「詩、音楽、絵画」と題し、イヴ＝マリー・アリュールがランボーの翻訳者としての小林秀雄についての研究成果を寄稿したほか、高木信宏はモーツァルトの批評家としての小林について考察した。小林亜美はスタンダードの小説作品において絵画が果たす役割について論じた。これらの発表を受け、「雑食性と生産性——作品の運命」という主題のもとにディスカッションが行われた。

「総括と展望」に充てられた三日目は、ジュリー・ブロックが大岡昇平の受容について報告したのち、受容性と創造性の関係をめぐる本プロジェクトの研究成果をまとめるべく、参加者全員でラウンドテーブルを行った。さらにその後には全体ディスカッションが設けられ、この共同研究の総括をなすとともに、来るべき人文研究にとって興味深い展望がひらかれた。

研究会開催実績：

第 1 回： 2011 年 12 月 2 日～ 4 日（於：高等研）

話題提供者：3 名

小林 亜美 神戸大学大学院人文学研究科研究員
駒井 稔 株式会社光文社文芸局長
フランソワ・ルセルクル パリ第 3 大学

Achievement:

2009 fiscal year:

In 2009, three meetings took place. To help us distinguish the general features of our subject, we started with a panoramic view of Stendhal's reception in the world and in Japan. The following two sessions were broadly taken up with Ôoka Shôhei's research on Stendhal's reception in Japan. Being very well documented, it supplied us with a great number of examples which allowed us to highlight how Stendhal's influence can be demonstrated in texts of Japanese literature (Ueda Bin, Oda Sakunosuke, etc.). What Ôoka Shôhei brings, however, is not only a meticulous analysis of the history of Stendhal's reception. As a writer, he also opens up an avenue we can explore on the relationship between the author and the reader. As well as being a Stendhal reader, translator and

specialist, Ôoka is also an author of literature, which led us to examine the movement from reception to creativity by referring us to Ôoka Shôhei's creative works, especially from a stylistic and thematic point of view. Each session was held in French and Japanese. In the third session, Mr. Sakurai Hiroshi, a producer from the NHK television channel, showed us an extract from the film "Chronicle of the Battle of Leyte - The Voice of the Dead" (NHK, 1995). The discussion about the film enabled us to confirm the functioning of life effect also in the case of cinematographical works. Negotiations have been begun with the Peter Lang Publishing House with a view to publishing the Proceedings in French, and a request for a grant has been made to this effect.

2010 fiscal year:

In 2010 two sessions were held. The first, entitled "The Functioning of Life Effect in Translated Works", was mainly on the works of Ôoka Shôhei, Ueda Bin, Balzac and Dostoievski. The second, entitled "The Translators' Point of View", was devoted to the French translations of Ôoka, to the Japanese translations of Chateaubriand and Stendhal, and to the German translation of the works of Stendhal. Both sessions aimed at describing the "life effect" phenomenon by giving concrete illustrations. They allowed us, on the one hand, to clarify theoretical notions by applying them in the exercise of literary studies, and on the other hand, to confirm the functioning of Münch's theory, and even its consolidation, in studies of Japanese literature. Besides the ordinary members and the invited researchers, many translators and translation specialists were present at this session, including Yves-Marie Allieux (translator of Nakahara Chûya), Brigitte Allieux (translator of Kobayashi Issa), and Corinne Atlan (translator of Murakami Haruki and of around forty contemporary Japanese novels), all recipients of the Konishi Translation Prize. All the discussions were held in French and Japanese.

As requested by the IIAS, measures have been taken to reduce operating costs. As a result, Marc-Mathieu Münch personally funded half of his plane ticket. Among the ordinary members, three people contributed to their personal expenses. Finally, the translators who came from France, mentioned above, also made contributions towards their own expenses.

2011 fiscal year:

The sixth session was initially planned for June 2011. But as it was difficult to invite overseas professors from Japan just after the catastrophe that took place in March, we decided to combine this session with the following one organised in December, when our research project was being completed. We had to plan for a three-day program in order to cover the whole range of our papers and our three years of questioning. It was also for this reason that we chose a three-day symposium entitled "Towards an Aesthetic Study of Literature". The theme of the first day, "The Editors' and Critics' Point of View", was introduced by François Lecerclé. Then Komai Minoru and Fukuda Yûdai spoke about the role of editors and critics in reception theory. The second day, entitled "The Effects of Literature, Poetry, Music and Painting", was divided into two sessions. During the morning session on "Stendhal, the Reader", Béatrice Didier gave a talk on the moralists, Kasuya Yûichi on Arab literature, and Yamamoto Akemi on Mrs Roland's Memoirs. The afternoon session on "Poetry, Music and Painting" contained papers by Yves-Marie Allieux on Kobayashi Hideo as a translator of Rimbaud, Takaki Nobuhiro on Kobayashi as a Mozart critic, Kobayashi Ami on the importance and the role of painting in Stendhal's novels. On the third day, devoted to "Conclusions and Future Prospects", Julie Brock presented her study of the reception of the works by Ôoka Shôhei. This

paper was followed by a panel discussion – in French and Japanese, as always – and led to the general conclusions summing up this collective research while revealing some interesting perspectives for research in the humanities.

研究活動総括：

このプロジェクトの主要な関心は、日本における西洋の諸文学作品の受容を、「影響」などという消極的な語によってではなく、それらの作品が様々な日本の読み手たちにもたらした衝撃のありように即して検証することにある。その立脚点となったのは、マルク＝マチュー・ミュンシュによる「生の作用」理論（書名）である。この理論は感覚の高揚に照準した極めて斬新なものであるが（ジャン・エレの発表を参照）、本プロジェクトはミュンシュのこの理論に依拠しつつ、小説家、翻訳者、批評家、編集者など、様々なタイプの読者にもたらされた西洋文学の衝撃の把握を目指すものである。

その際、まずは研究上のコーパスを構築するために、西洋文学を濃密に受容した日本の作家たちのテキストを集積した。そうしたなかでとりわけ大きな地位を与えられたのが大岡昇平である。というのも、この日本の大作家は、同時にフランスの作家スタンダールについての非常に熱心な研究者でもあったからだ。

第一年次には三回の研究会が開かれ、そのうちはじめの二回はスタンダールの世界的な受容（フィリップ・ベルティエ）ならびに日本での受容（西川長夫、ジュリー・ブロック）に分析の目が向けられた。三回目の研究会では大岡昇平に焦点を当て、花崎育代、ミシェル＝ド・ボワシュー、ジュリー・ブロックの研究発表のもと、大岡の主要作品をスタンダールとの関連から検討することが目指された。端的に述べて、小説家としての大岡の作風は文体・形式面でスタンダールを単に模倣するようなものではなく、まさに小説なるものについての美的な観点、ならびにそれにもとめられる倫理などの水準においてスタンダールとあり方をともにするようなものであった。大岡はまさに、かのフランス人作家についての極めて深い理解・洞察を有していたがゆえに、そこからまったく新しい日本的文学創造を結実させることができたのである。なお、この初年次第三回目の研究会においては、かつてNHKにてプロデューサーをつとめた桜井均の参加を得、研究発表にあわせて大岡の『レイテ戦記』についてのドキュメンタリー作品が上映された。桜井の発表ののちになされたディスカッションでは非常に刺激的な対話がなされ、いまだ十分に知られているとはいえない大岡のこの作品が世界文学にも誇りうる大作であるとの総意を得るに至った。

先に述べた通り、文学的創造性なるものはいわゆる書き手の側ではなく、翻訳者、編集者、批評家から、果てには一般的な読み手まで、広く受容者がわに位置する人間においても現れるものである。第二年次の研究は、こうした受け手の側の創造性がいかなるかたちをとって現れるのかを検討するために、二度の研究会を開催した。上述した「生の作用」理論を対象とした研究会（通算四回目）は、マルク＝マチュー・ミュンシュによる同理論の方法論としての有用性を探ることを目指すものであった。今回はこのミュンシュが発表者のひとりとして参加し、自身の理論を大岡の『野火』の読解に即していわば実践的に提示している。また、このように発表者自身が自らの読みの体験を批判的に発表するような機会を本プロジェクトでは「ケース・スタディ」として期間中に数度取り入れている（星野紘一郎、中川久定、西川長夫、ジュリー・ブロック）。同じく、清水孝純や松村博史、また小川紘子の論考は、当の理論が様々な文学作品を多層的に検討するうえで有益だけでなく、上記のような「創造性」が、「読む」というもうひとつの文学実践にも極めて豊かなかたちであられるということを明らかにしている。

続いて、翻訳という行為における創造性の問題に関しては、『赤と黒』の翻訳者である野崎敏、アンリ・ベールから妹ポーリーヌへの手紙を翻訳した岩本和子のふたりが、これに先立つ研究会において、翻訳に際しての非常に困難が主に口語表現にかかわるものであることを示していた。この

点に関して翻訳の問題を扱った研究会（第五回）では、杉本圭子がスタンダール作品の複数の翻訳を比較検討したうえで、翻訳における理想という問題に向き合い、小野潮はシャトーブリアンの作品からいくつかの具体例をひくことで、言語と文化の差異がときに乗り越え不可能なまでの翻訳条の困難さをもたらすということを示している。さらに『武蔵野夫人』の仏語訳を手がけているティエリ・マレーは、当時の作業をふりかえりながら、「時制」という問題についての認識の密度をめぐって生じる日仏二言語間のズレを浮き彫りにした。ジュリー・ブロックはまた、アルベール・ティボーデのテキストから引用された一節の分析をめぐって、大岡昇平における翻訳の様式についての議論を展開した。

「編集」・「批評」の相に関わるものとしては、第三年時に開催された唯一の研究会が対応している。そこでは、近年非常な脚光を浴びた光文社「古典新訳文庫」の企画を手がけた駒井稔による発表の機会が得られ、西洋文化に慣れ親しんだ新たな世代の日本人読者を前にして、翻訳者の側にどのような革新が求められているかということについて貴重な示唆がもたらされた。批評の役割に関するものとしては、ひとつの文学作品が「読まれる」ことの基盤として、当の作品に関する批評的言説の成立を見ようとする福田裕大の論、ならびに、大岡の諸作品をめぐる新旧の批評的創造性の相違を浮き彫りにするジュリー・ブロックの論とがもたらされている。このうちジュリー・ブロックの発表は、それぞれ1955年と2011年になされた大岡昇平についての「合評」を対象とし、世代を隔てた二つの批評それぞれの意識や問題点を洗い出すものであった。なお、文学の受容における批評の意義に関しては、プロジェクト第一年次において、スタンダール研究のなかでもとくに女性研究者の業績を対象化しようとしたフランソワ・ヴァヌストゥイズの成果があることを付言しておく。

あわせて本プロジェクトでは、うえのようなものからさらに観点を広げ、絵画、音楽、劇作といった種々の芸術の受容と文学的創造との繋がりを探求する試みを第三年次の研究会のなかで設けている。フランスから最新の研究成果を寄稿してくれたベアトリス・ディディエは、スタンダールの小説創造の根本（彼が劇作家を志していたころである）に、若き日になされたモラリスト作品についての読書体験がおかれていると論じ、小林亜美は同じくスタンダールの文学作品に、作家自らがこころみた絵画史の執筆体験が強く反映していることを突き止めている。また、高木信宏とイヴ＝マリー・アリュールは、日本におけるアルチュール・ランボーの翻訳者であり、二十世紀の日本を代表する批評家であった小林秀雄についての研究発表をなした。高木の発表は、小林秀雄のもつ固有の批評意識の一端が、モーツァルトの音楽作品を評したアンリ・ゲオンのテキストに関するわずかな「誤読」から生みだされていくさまを精緻に辿るものである。イヴ＝マリー・アリュールの発表もまた、ランボーの詩作品の翻訳に際して小林が犯した「誤訳」に関してなされたものである。このとき小林は、当の翻訳のうちに原典には見られない要素を付加しており、翻訳を通じて作品を受け取る側の文化（＝日本）に適応したある種の新要素を、つまりは原典にとっての異質性を翻訳作業のなかで創造したということになる。高木とアリュールというふたりの論者が、はからずも小林ならではの個人的読解から生じた創造性に着目したことは興味深い一致である。さらに述べておけば、小林の批評術に代表される主観的な読みの身振りが、ある意味では二十世紀日本における西洋文学の受容の類型をなすということについて、清水孝純が重要なコメントをもたらしてくれた。

2011年12月になされた第六回研究会では、フランスから招聘したフランソワ・ルセルクルによる参加がなされたが、ルセルクルは事前に本会の成果すべてに目を通したうえで、客観的な観点からこのプロジェクトの特徴を総括してくれた。それによると、美学・比較研究・文学など幅広い領域にわたる学際性を誇った本会は、文学の受容と創造に関わる様々な実践を、絶えず経験的水準での分析と理論化の試みとを往復させながら、新たに考察しなおす非常に意欲的なものである。とりわけ個々の読書体験を研究対象とし、それにたいしある種の遡及的分析を試みるという技法が本会の成果の極めて斬新な点であり、また刺激的な特徴であると評価された。

他方、ルセルクルは上述したミュンシュの理論に対しては一定の留保を見せた。当の理論が文学作品の受容に関する諸問題を扱ううえでやや一般的に過ぎるとするのがその理由であるが、これに対しジュリー・ブロックは、「生の作用」なる呼称を掲げてしまったことがひとつの誤解の要因になってしまったのではないかと応答をなした。こうした呼称のゆえに、ミュンシュ理論はしばしば「受容理論」の類いと誤解され、「文学理論」として認識し難いものとなっている。実際、ミュンシュが自らの理論構築に際して読書・受容に関する既存の研究成果を取り入れようとはせず、自ら集積した作家たちのテキストに対する調査に軸足を置いていることは確かであり、そうである以上、「受容理論」としてミュンシュの考察に疑義を付すルセルクルの考えは理解しうるものである。

ルセルクルによるこうした指摘を認めつつも、ブロックはミュンシュ理論のうち——その呼称に何かしらの修正を加えるという条件で——文学なるものの美学的研究の可能性を基礎づけるうえで一定の意義を認めようとした。ミュンシュによって明確化された、創作・受容・作品という三項からなる相互作用の体系は、文学にかかわる営為をひとつの全体として捉え、何よりそれを一個の芸術的営為として考察することを可能にする。ブロックによれば、文学作品が生み出す衝撃を読み手の観点から突き止めようとしてきた本プロジェクトの原動をなしてきたものはこうした考え方であった。

第六回研究会の締めくくりとしてなされたディスカッション「総括と展望」では、それまでになされたすべてのディスカッションと同様、非常に活発かつ生産的な意見交換が行われた。再度特記しておけば、本プロジェクト最大の特徴は、こうした研究発表から質疑応答、ならびに会の運営にもとめられるすべての工程を日仏二カ国語ですすめてきたという点にある。とくに上記「総括と展望」においてなされた議論は、双方の言語の境界に身をおいた日仏両国の研究者が、一体になって新たな研究の可能性を模索するという本プロジェクトの実りを実証するものであったと自負している。なお、本プロジェクトのこのような特徴を積極的に発信するべく、研究成果の公表に際し、日仏二カ国語での刊行物を準備するという方針で参加者たちの総意を得た。具体的には、日本語に関しては国際高等研究所の成果刊行制度を利用して頂きたい。また、フランス語での公表に関しては、スイスの著名な学術出版社であるピータ・ラング社とのあいだで交渉をなし、すでに約半分の成果が書籍化されている。こうした成果公表をなすことにより、文学における創作・受容・作品の相互作用という主題に関して国際的な学術交流がもたらされ、人文学諸領域でさらなる刷新がなされることを期待している。

とくに日本での文学研究の現状に即していえば、「受容」という問題が今日でもなお「影響」という受動的相のもとに扱われることが少なくない。それは日本語でいう「受容」にそもそもからある種の受動性が刻み込まれているがゆえのことかもしれないが、本プロジェクトはそうした点を鑑み、「受容」の水準にあらわれる何かしらの能動性・構築性（それこそ我々が「受け手側の創造性」と捉えてきたものである）に積極的に目を向けてきた。

総括すると、創造性とは必ずしも実際に作品をつくり出す作家、ならびに創作者に固有の資質であるわけではない。それは同時に、文学・芸術作品を受け取る側、つまり読者、聴衆、観衆といった人々のうちにもまた認めうるものなのである。こうした受容者側の創造性を認識することは、創造という能力がある種の特権的存在に限定されたものではなく、広く人間全般に分有されたものであることを認識することにもつながる。こうした考え方はこのグローバル化された社会において、我々人間がその想像力を地球規模にまで行き渡らせつつも、個々人の固有性をはっきりと自覚するような、来るべき世界像のひとつの礎となることだろう。

こうした歩みから、世にあまねく無数の作品が、ときに「傑作」として、時代・国境を越えて受け継がれていくことの背景には、そうした作品群に共通する統一的性質の所在が示されたようにも

思われる。本プロジェクトが追い求めた「創造性」は、まさにこのような意味での統一性に目を向けるうえで極めて有益な観点をもたらすものであったといえる。

最後となったが、フランスにおける気鋭の日本文学翻訳者として知られるコリーヌ・アトラン、同じく日本の詩歌の翻訳によって知られるイブ＝マリー・アリュール、ブリジット・アリュール、またフランス革命期のテクストについて優れた研究をもたらしているエリック・アヴォカなどの貴重な参加が得られたこともあわせて述べておきたい。本研究プロジェクトに対し上記のような極めて実りある学術研究活動の場を与えてくれた国際高等研究所、ならびに毎回の会の運営に際して細やかな心配りを届けてくださったスタッフの方々に対し、心より感謝の意を表したい。

Whole Achievement:

The aim of this project was to examine the impact of Western works in Japan, not in terms of “influence” as is often the case, but by questioning the effects of the reading of foreign works on Japanese readers. We examined the impact of Western works on authors, translators, editors and literary critics as well as everyday readers using as our starting point the book by Marc Mathieu Münch: “The Life Effect or the Singular in Literature” (Ed. Honoré Champion, 2004) – a literary theory based on a fundamental axiom that the reading of novels arouses a reaction in the reader of all the faculties of the brain and mind (cf. the paper by Jean Ehret).

Our research originated from a study of a collection of Japanese works whose authors were strongly influenced by their readings of Western literature. We reserved a special place for Ôoka Shôhei, one of the great Japanese writers of the post war period and an eminent specialist on Stendhal.

The program for the first year included three meetings. The first two led to an analysis of the reception of Stendhal in the world (Philippe Berthier) and in Japan (Nishikawa Nagao, Julie Brock). The third one focussed on Ôoka Shôhei whose most important works were analysed in the light of those by Stendhal. On this occasion Hanazaki Ikuko, Sekizuka Makoto, Michel de Boissieu and Julie Brock showed that Stendhal’s influence on Ôoka Shôhei is in no way translated by an imitation of style or form but through a sort of communion at the aesthetic level of the novel and through the ethics of the writer as a witness to his time as well as a social actor. It was by reflecting on Stendhal’s ideas and studying his work that Ôoka managed to extricate himself from Japanese literary traditions and create an original piece of work. During this session, Sakurai Hitoshi, a producer of historical documentaries for the TV channel NHK, presented his work on a key text by Ôoka Shôhei: a Chronicle on the Battle of Leyte. The very lively debate that followed this paper came to the conclusion that this largely unknown work is probably a masterpiece of world literature.

In the second year, we wanted to know how creativity manifests itself among readers who are not writers of literature, but translators, editors, critics and even everyday readers. The program included two meetings. The first one was devoted to the “life effect” theory and aimed at examining its usefulness from a methodological point of view. As a guest speaker, M.-M Münch provided an example of his theory, in his analysis of the Fires of d’Ôoka Shôhei. The case studies that followed by Hoshino Kôichirô, Nakagawa Hisayasu, Nishikawa Nagao and Julie Brock were based on a rereading of a work of literature where the author uses his own experience as a reader. Moreover, we were able to verify that the reader of literature develops a creative activity as in the case of Uchida Rôan (Shimizu Takayoshi) or Ueda Bin (Ogawa Hiroko), but also Balzac, Stendhal and Ôoka Shôhei (Matsumura Hiroshi).

This led to questions about the creativity of translators. Nozaki Kan, translator of *The Red and the Black*, and Iwamoto Kazuko, translator of Henri Beyle's letters to his sister Pauline, had already shown, during the previous sessions, that the main difficulty in translation lies in the style of the spoken language, especially that of women which evolved considerably in Japan during the XIXth et XXth centuries. In the session on translation, Sugimoto Keiko showed what could be an ideal one by comparing different attempts at translating Stendhal, and Ono Ushio took examples from Chateaubriand's work to show that cultural and linguistic differences can at times give rise to dilemmas that are unsurmountable. Thierry Maré, who translated *La Dame de Musashino* twenty years ago, went back to this experience to analyse retrospectively what are for him the most important issues in translation. In particular, he developed a series of thoughts on the sequence of tenses. Julie Brock discussed the style of Ôoka Shôhei's translation through the analysis of a quote from Albert Thibaudet.

The editors' and critics' point of view was the object of a special session on the third day. Komai Satoshi, the director of the collection "New Translations of critics" from the publishing house Kôdansha, threw light on the need today for Japanese translators, whose readers are familiar with Western cultures, to renew the style of their translations. The papers by Fukuda Yûdai and Julie Brock dealt with the issue of criticism. Mr Fukuda shed light on the fact that the reception of a literary work is based on the presence of a critical discourse – which is its key condition. Julie Brock based her presentation on two sets of critical studies of the works by Ôoka Shôhei, from 1950 and 2011, in order to show that the evolution of criticism can be largely explained through different cultural and generational points of view . During the first year of our research, François Vanhoosthuysse had already taken on this question of criticism by focussing on the studies of Stendhal by women.

The opening up of the scope of our questioning to works of art led to a day dedicated to the reception of theatre and painting by Stendhal as well as music and poetry by Kobayashi Hideo. From the standpoint of current studies on Stendhal at the University of Grenoble, Béatrice Didier spoke about the influence of the moralists on Stendhal's development at a time when he was dedicated to theatrical works. Kobayashi Ami showed that the early works by Stendhal on Italian painting had left their mark on his novels. Yves-Marie Allieux and Takaki Nobuhiro studied Kobayashi Hideo, a translator of Rimbaud and undoubtedly the most representative critic in XXth century Japan. Mr Takaki used as a starting point a misinterpretation by Kobayashi in the translation of Henri Ghéon to show how it founded his own aesthetics of reception. Yves-Marie Allieux spoke about misinterpretations by Kobayashi, as a translator of Arthur Rimbaud. She used Kobayashi's standpoint to show that, because such a misinterpretation introduces a foreign element, it creates a hybrid work, adapted to the climate of the target culture. Both of them showed that the creativity of the critic is nourished by a very personal reception of literary works. Shimizu Takayoshi made comments to this effect to show that this subjectivist view of criticism had left its mark on the reception of Western Literature in Japan at the beginning of the XXth century.

During this last session we invited François Lecerle to comment on our work. After having read all the texts from the first session, Lecerle presented a comparative synthesis. The major characteristic of our project, in his opinion, is interdisciplinary (aesthetics, studies in literature and comparative literature, contemporary history, etc.). While noting the experimental nature of this research, he pointed out a movement back and forth between analytical practice as well as an attempt at theorisation. The originality of the project, from his point of view, lies mainly in

focussing the methodology on one's own experience as a reader that leads retrospectively to an analysis. This conception of literary studies, oscillating between subjectivity and objectivity, seemed to him to be both stimulating and interesting.

François Lecerle expressed his reservations about the Münchian theory, which seems too general from his point of view to cover all the questions related to the reception of literary works. Julie Brock replied that this criticism is relevant if based on the choice of the "Life effect" as a title for this theory. As this title leads to the phenomena of reception, it becomes effectively impossible to consider the theory by Münch as one for literature, and all the more so as it is based on a corpus of poetics and neglects prior studies of reception, and particularly the most contemporary works. While acknowledging François Lecerle's criticism, she indicated that this theory seemed nevertheless useful as long as one went beyond the title in order to build an aesthetics for literature. The system created by Marc-Mathieu Münch, with its three interactive layers involving creation, reception and the work itself, gives coherency to our study of the literary phenomenon and shows that literature is first and foremost an art. In any case, according to Julie Brock, this is what motivated our research into the impact of literary works from the readers' point of view.

The closing session led to a debate on the perspectives for our project. The first concerns were editorial, as the proceedings will be published in Japanese by the Institut international des Hautes études (IIAS) and in French by Peter Lang (volume 1 is already in print). It is through these publications that we hope to encourage an international debate on the theme of interactivity between author, reader and literary works that will be of interest above all to specialists in the humanities.

As for literary studies in Japan, if they tend, even today, to treat questions of reception from the viewpoint of "influence" it is probably because, semantically, the term "reception" (juyô) also means "passiveness". Hence it seemed important for us to show that reception includes a productive and constructive component. This is what we call the creativity of the audience.

In conclusion, creativity does not only designate a specific aptitude of writers (and artists) who are creators of works. It is to be taken also as an activity of the reader, the listener and the spectator of literary works (and works of art in general). Recognising the creativity of the audience is recognising that creation is not just specific to a privileged few but to all human beings. For us, such a hypothesis seems fundamental in order to better share a world that is both global and conscious of its identity.

Finally, it can be asked why just a few of an infinite number of works go down in history. Our definition of the notion of creativity can help shed light on the common characteristics of a successful work.

We would like to acknowledge the participation of Corinne Atlan, translator of Japanese literature, Yves-Marie and Brigitte Allieux, translators of Japanese poetry, as well as Eric Avocat, a specialist in the discourse of the Revolution. In its published form, each session will include a preface by an eminent specialist from outside our team (representing areas such as aesthetics, French literature, Japanese literature, comparative literature and translation theory), at times a commentary, and a synthesis.

We would like to express our gratitude to the directors of the Institut international des Hautes études for having accepted this collective research within the framework of an academic project and thank the entire team at this Institute for organising the sessions perfectly.

担当：天野副所長

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2009年度第1回研究会プログラム

開催日時：2009年 5月29日（金） 13：00～21：30
5月30日（土） 9：30～15：30

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）ほか

研究代表者：ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

担当所長・副所長：川北 稔 副所長

出席者：（16人）

研究代表者 **ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

参加研究者 （13人）	相澤 伸依	京都大学大学院文学研究科非常勤講師
	岩本 和子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
	小野 潮	中央大学文学部教授
	粕谷 雄一	金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授
	清水 孝純	九州大学名誉教授
	杉本 圭子	明治学院大学文学部准教授
	関塚 誠	関東学園大学附属高等学校講師
	高木 信宏	九州大学大学院人文科学研究院准教授
	** 中川 久定	京都大学名誉教授
	** 野崎 歆	東京大学大学院人文社会系研究科・文学部准教授
	星野 紘一郎	共立女子短期大学文科非常勤講師
	松村 博史	近畿大学語学教育部准教授
	山本 明美	神戸大学大学教育推進機構非常勤講師

**：スピーカー

話題提供者 Philippe Berthier（フィリップ・ベルティエ） パリ第3大学教授
（ゲストスピーカー） Jean Ehret（ジャン・エレ） サクレ・クール大学ルクセンブルグ大公国准教授
（2人）

プログラム

主テーマ：スタンダードが日本文学に及ぼした「作用」と Effet de vie について

5月29日（金）「現代日本人とスタンダード」

13：00～17：30 研究会〔216会議室〕

司会：清水孝純、ディスカッションコーディネータ：ジュリー・ブロック

13：00 導入 ジュリー・ブロック、中川久定（10分：含通訳時間）

13：10 フィリップ・ベルティエ発表「越境するスタンダード」（50分：含通訳時間）

仏日通訳：小野 潮

14 : 00 ジュリー・ブロック発表「大岡昇平の論文「日本のスタンダード」にみる
受容史の主題系と社会的観念についての問題点」
(50分：含通訳時間)

仏日通訳：相澤 伸依

14 : 50 〈休憩 20分〉

15 : 10 野崎 歓発表「フランス文学受容の現在——『赤と黒』新訳をめぐって」
(50分：含通訳時間)

16 : 00 ディスカッション「スタンダード受容と日本文学」
通訳：小野 潮、野崎 歓、松村 博史、相澤伸依、ジュリー・ブロック

17 : 30 終了
〈けいはんなプラザへ移動 夕食〉

20 : 00 ディスカッション「スタンダード観、大岡昇平観、翻訳不可能な部分」
〔けいはんなプラザ 5階〕

22 : 00 終了

5月30日(土)「受容と創造性における *Effet de vie* の問題」

9 : 30~15 : 00 研究会〔216会議室〕

司会：杉本圭子、ディスカッションコーディネータ：小野 潮

9 : 30 ミンシュ氏からのメッセージ朗読 (20分：含通訳時間)
仏日通訳：杉本 圭子

9 : 50 ジャン・エレ発表「スタンダード「効果」——“*Effet de vie*”にもとづくスタンダード
受容研究序論」 (50分：含通訳時間)
仏日通訳：相澤 伸依

10 : 40 エレ先生への質問
通訳：小野 潮、野崎 歓、松村 博史

11 : 40 〈休憩 20分〉

12 : 00 エレ先生への質問の続き
通訳：小野 潮、野崎 歓、松村 博史

12 : 20 中川久定解説「*Effet de vie* という概念を日本文学研究に適応する事が必要ではないか」
(20分：含通訳時間)

12 : 40 〈昼食 50分〉

13 : 30 質問に対するエレ先生の回答まとめ
仏日通訳：小野 潮、松村 博史

15 : 30 終了

配布資料：紹介不可

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2009年度第2回研究会プログラム

開催日時：2009年 11月13日（金） 13：00～22：00
11月14日（土） 9：30～15：00

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）ほか

研究代表者：ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

担当所長・副所長：川北 稔 副所長

出席者：（15人）

研究代表者 ** ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

参加研究者 相澤 伸依 京都大学大学院文学研究科非常勤講師
（11人） ** 岩本 和子 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
小野 潮 中央大学文学部教授
粕谷 雄一 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授
清水 孝純 九州大学名誉教授
杉本 圭子 明治学院大学文学部准教授
関塚 誠 関東学園大学附属高等学校講師
** 中川 久定 京都大学名誉教授
星野 紘一郎 共立女子短期大学文科非常勤講師
松村 博史 近畿大学語学教育部准教授
山本 明美 神戸大学大学教育推進機構非常勤講師
**：スピーカー

話題提供者 西川 長夫 立命館大学名誉教授
（ゲストスピーカー） François Vanoosthuyse パリ第3大学准教授
（3人） Eric Avocat 京都大学文学部フランス語フランス文学研究室講師

プログラム

主テーマ：＜私＞はいかにスタンダードを読んできたか

11月13日（金）「単数／複数 日本におけるスタンダード受容の私小説」
13：00～17：30 研究会〔216会議室〕

司会：星野紘一郎、ディスカッションコーディネータ：清水孝純

13：00 挨拶 ジュリー・ブロック（10分：含通訳時間）

13：10 導入 星野 紘一郎（20分：含通訳時間）

13：30 西川長夫「日本におけるスタンダード受容の問題
ー「私」はいかにスタンダードを読んできたか」（60分：含通訳時間）

14：30 ジュリー・ブロック「スタンダードの読者・批評家としての大岡昇平ーその根本的な態度」

(40分：含通訳時間) 仏日通訳：相澤伸依

15：10 〈休憩 10分〉

15：20 中川久定「織田作之助に対するスタンダールの影響—偶然と自尊心の関係—」

(50分：含通訳時間)

16：10 ディスカッション「戦後日本の読者による受容という現象」(80分)

通訳：松村博史

17：30 終了

〈けいはんなプラザへ移動 夕食〉

20：00 ディスカッション「戦後日本の読者による受容という現象」

通訳：松村博史

22：00 終了

11月14日(土)「男性／女性 スタンダール研究における女性研究者の貢献」

9：30～15：00 研究会〔216会議室〕

司会：粕谷祐巳、ディスカッションコーディネータ：Eric Avocat

9：30 野崎 勲からのメッセージの朗読(20分：含通訳時間)

9：50 François Vanoosthuyse

「彼女たちと彼—スタンダール研究における女性たち」

(50分：含通訳時間) 仏日通訳：松村博史

10：40 〈休憩 10分〉

10：50 岩本和子「アンリ・ベールと妹ポーリーヌの書簡にみる〈創造性〉」

(40分：含通訳時間)

11：30 ジュリー・ブロック

ケース・スタディ「人間たちが分かちあう世界

ジュリアン・ソレルとクレープの奥方」

(30分：含通訳時間) 仏日通訳：相澤伸依

12：00 ディスカッション「ケース・スタディを受けて」(30分：含通訳時間)

12：30 〈昼食 60分〉

13：30 ディスカッション「男性／女性による読解の違い」(90分)

通訳：松村博史

15：00 終了

配布資料：紹介不可

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2009年度第3回研究会プログラム

開催日時：2010年 3月5日（金） 13：00～22：00
3月6日（土） 9：30～15：00

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）ほか

研究代表者：ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

担当所長・副所長：川北 稔 副所長

出席者：（13人）

研究代表者 ** ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

参加研究者 相澤 伸依 京都大学大学院文学研究科非常勤講師
（9人） 岩本 和子 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
小野 潮 中央大学文学部教授
粕谷 雄一 金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系教授
清水 孝純 九州大学名誉教授
** 関塚 誠 関東学園大学附属高等学校講師
** 中川 久定 京都大学名誉教授
** 星野 紘一郎 共立女子短期大学文科非常勤講師
山本 明美 神戸大学大学教育推進機構非常勤講師
**：スピーカー

話題提供者： 桜井 均 NHK放送文化研究所所員／立命館大学映像学部客員教授
（ゲストスピーカー） 花崎 育代 立命館大学文学部人文学科日本文学専攻教授
（3人） ミシェル・ド・ボワシュー 岡山大学大学院社会文化科学研究科講師

プログラム

主テーマ：「大岡昇平とスタンダード」

3月5日（金）「大岡昇平～恋愛、戦争、文学」

13：00～17：30 研究会〔216会議室〕

司会：小野 潮 ディスカッションコーディネータ：関塚 誠

13：00 導入 ジュリー・ブロック（20分：含通訳時間）

13：20 星野紘一郎「大岡昇平の原稿、校正、加筆・改稿

－「中原中也は卒業だ」「今年はこれで食べられるよ」「悪いけど、ぼくは初校が原稿だからね」

（50分：含通訳時間）

14：10 花崎育代「恋愛と結婚と——大岡昇平・スタンダード・司祭アンドレ」

（50分：含通訳時間）

15：00 〈休憩 20分〉

15：20 ジュリー・ブロック「大岡昇平研究の現状と展望」（50分：含通訳時間）

16：10 ディスカッション「大岡昇平～作家の体験と創造」

17：30 終了

〈けいはんなプラザへ移動 夕食〉

20：00 桜井 均「映画『死者たちの声～大岡昇平・レイテ戦記』紹介」（上映 25分）

「死の無意味について～戦記と歴史の間～」

（講演 35分：含通訳時間）

21：00 ディスカッション「戦争体験と創造」（60分）

22：00 終了

3月6日（土）「大岡昇平とスタンダード」

9：30～15：00 研究会〔216会議室〕

司会：小野 潮 ディスカッションコーディネータ：星野紘一郎

9：30 導入 中川久定（20分：含通訳時間）

9：50 ミシェル・ド・ボワシュール「『俘虜記』とスタンダードの厳格さという理想」

（50分：含通訳時間）

10：40 〈休憩 10分〉

10：50 関塚 誠「大岡昇平『俘虜記』とスタンダード自伝作品」（50分：含通訳時間）

11：40 ディスカッション「大岡昇平におけるスタンダード受容」

12：30 〈昼 食〉

13：30 ディスカッション

15：00 終了

配布資料：（公開不可）

第3回研究会概要

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2010年度第1回（通算第4回）研究会プログラム

開催日時：2010年 7月2日（金） 13：00～23：00
7月3日（土） 9：30～15：00

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）ほか

研究代表者：ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

担当所長・副所長：川北 稔 副所長

出席者：（15人）

研究代表者	** ジュリー・ブロック	国際高等研究所企画委員／ 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
参加研究者 （10人）	相澤 伸依	東京経済大学経営学部専任講師
	岩本 和子	神戸大学大学院国際文化学研究科教授
	小野 潮	中央大学文学部教授
	** 清水 孝純	九州大学名誉教授
	高木 信宏	九州大学大学院人文科学研究院准教授
	中川 久定	京都大学名誉教授
	福田 裕大	京都精華大学非常勤講師
	星野 紘一郎	共立女子短期大学文科非常勤講師
	** 松村 博史	近畿大学文芸学部准教授
	山本 明美	神戸大学大学教育推進機構非常勤講師

**：スピーカー

話題提供者
（ゲストスピーカー）
（2人）

マルク＝マチュー・ミュンシュ	メス大学名誉教授
小川 紘子	元久留米信愛女学院短期大学助教授

その他の参加者
（2人）

フィリップ・ジャンヴィエ＝カミヤマ	フランス総領事
ミシェル・ド・ボワシュ	岡山大学大学院社会文化科学研究科講師

プログラム

主テーマ：「翻訳作品における Effet de vie の働き」

7月2日（金）

「大岡昇平と上田敏における Effet de vie の働き」

13：00～17：30 研究会〔216会議室〕

司会：岩本和子 ディスカッションコーディネータ：高木信宏

13：00 開会の辞 ジュリー・ブロック

13：20 スピーチ フィリップ・ジャンヴィエ＝カミヤマ フランス総領事

13：40 スピーチ 中川久定

14：00 マルク＝マチュー・ミュンシュ「大岡昇平の仏語訳作品における Effet de vie の働き」
(訳：福田裕大)

14：50 ジュリー・ブロック「『野火』の創作におけるヴェルレーヌの作用」 (訳：福田裕大)

15：40 〈休憩 20分〉

16：00 小川紘子「上田敏の小説『うづまき』におけるスタンダールの作用」

16：50 ディスカッション「大岡昇平と上田敏の作品における Effet de vie」

討議者：小野潮、松村博史

17：30 終了

〈けいはんなプラザへ移動 夕食〉

20：00 ディスカッション「Effet de vie の働きについて」

討議者：小野潮、松村博史

23：00 終了

7月3日（土）

「ドストエフスキーとバルザックにおける Effet de vie の働き」

9：30～15：00 研究会〔216会議室〕

司会：高木信宏 ディスカッションコーディネータ：岩本和子

9：30 導入 ジュリー・ブロック

10：00 「ジャン・エレからのメッセージ」

10：10 清水 孝純「ドストエフスキーの作品の翻訳における Effet de vie の働き」

11：00 松村 博史「生の交差点としての『ベール氏研究』：バルザック、スタンダール、大岡昇平」

11：50 〈休憩 10分〉

12：00 ディスカッション「Effet de vie 理論に基づいた研究方法について」

討議者：小野潮、松村博史

13：10 〈昼 食〉

14：00 ディスカッション（ミュンシュ氏との討論）

討議者：小野潮、松村博史

15：00 終了

配布資料：紹介不可

・第4回研究会概要

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2010年度第2回研究会プログラム

開催日時：2010年 11月12日（金） 13：00～17：30, 20：00～22：30
11月13日（土） 9：30～15：00

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）ほか

研究代表者：ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

担当所長・副所長：

出席者：（12人）

研究代表者 ** ジュリー・ブロック 国際高等研究所企画委員／
京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授

参加研究者 相澤 伸依 東京経済大学経営学部専任講師
（9人） ** 小野 潮 中央大学文学部教授
粕谷 祐己 金沢大学歴史言語文化学研究域教授
清水 孝純 九州大学名誉教授
** 杉本 圭子 明治学院大学文学部准教授
関塚 誠 群馬県立桐生南高校教諭
福田 裕大 京都精華大学非常勤講師
松村 博史 近畿大学文芸学部准教授
山本 明美 神戸大学大学教育推進機構非常勤講師
**：スピーカー

話題提供者 ティエリ・マレー 学習院大学文学部教授
（2人） マイケル・ジャコブ グルノーブル大学教授

その他の出席者：

イヴ＝マリー・アリュール 元トゥルーズ大学、ブリジット・アリュール 元トゥルーズ大学、
コリーヌ・アトラン 翻訳者、ミシェル・ド・ボワシュール 岡山大学、
小川絃子 元久留米信愛女学院短期大学

プログラム

主テーマ：「翻訳作業における生の作用」

11月12日（金）

「スタンダールとシャトーブリアンを翻訳する」

13：00～17：30 研究会〔216会議室〕

司会：松村博史 ディスカッションコーディネータ：山本 明美

13：05 開会の辞 ジュリー・ブロック （20分：含通訳時間）

13：25 マイケル・ジャコブ「スタンダールからスタンダールへ 『赤と黒』のドイツ語訳における諸問題」 （50分：含通訳時間）

14：15 杉本圭子「邦訳の際の校訂版の活用について 『赤と黒』を例に」 （35分：含通訳時間）

14：50 〈休憩 25分〉

15：15 小野潮「シャトーブリアンを日本語に翻訳する」 （55分：含通訳時間）

16：10 ディスカッション 「西洋の文学作品の日本語訳について」

討議者：福田裕大、松村博史

17：30 終了〈移動 夕食〉

20：00 ディスカッション「西洋の文学作品の日本語訳について（第二部）」

討議者：小野潮、福田裕大、松村博史

23：00 終了

11月13日（土）

「大岡作品を翻訳する」

9：30～15：00 研究会〔216会議室〕

司会：山本 明美 ディスカッションコーディネータ：福田 裕大

9：30 「クラウディオ・ガルデリジからのメッセージ」 （20分：含通訳時間）

9：50 ティエリ・マレー「二十年を経て 『武蔵野夫人』の翻訳を再読して」 （45分：含通訳時間）

10：35 〈休憩 15分〉

10：50 ジュリー・ブロック「大岡昇平『わがスタンダール』を翻訳する 引用の効果」 （60分：含通訳時間）

11：50 ディスカッション「日本語作品の仏語訳について」

討議者：小野潮、福田裕大、松村博史

12：30 〈昼 食〉

13：35 ディスカッション「総括」

討議者：小野潮、福田裕大、松村博史

15：00 終了

配布資料：第5回研究会概要

スタンダールからスタンダールへ『赤と黒』のドイツ語翻訳にあたっての問題点ー

ミシェル・ジャコブ

「私」はスタンダールをどう読んだか 序文

ベアトリス・ディディエ

国際高等研究所
研究プロジェクト「受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合」
2011年度第1回（通算第6回）研究会プログラム

開催日時：2011年 12月2日（金） 13：00～17：30, 20：00～22：30
12月3日（土） 9：30～17：30, 20：00～22：30
12月4日（日） 9：30～12：30

開催場所：国際高等研究所 216会議室（2F）
けいはんなプラザ会議室「ボルガ」（5F）
619-0237 京都府相楽郡精華町光台1丁目7番地

研究代表者：ジュリー・ブロック 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
担当所長・副所長：天野 文雄 副所長

出席者：（14人）

研究代表者 ** ジュリー・ブロック 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授
参加研究者 相澤 伸依 東京経済大学経営学部専任講師
(メンバー) ** 岩本 和子 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
(10人) 小野 潮 中央大学文学部教授
** 粕谷 祐己 金沢大学歴史言語文化学研究域教授
清水 孝純 九州大学名誉教授
関塚 誠 群馬県立桐生南高校教諭
** 高木 信宏 九州大学大学院人文科学研究院准教授
** 福田 裕大 京都精華大学非常勤講師
松村 博史 近畿大学文芸学部准教授
** 山本 明美 神戸大学大学教育推進機構非常勤講師

**：スピーカー

話題提供者 フランソワ・ルセルクル パリ第三大学
(ゲストスピーカー) 駒井 稔 株式会社光文社文芸局長
(3人) 小林 亜美 神戸大学大学院人文学研究科研究員

プログラム

12月2日(金) 【国際高等研究所 216号室】13:00~17:30

一日目「評論家、編纂者、出版社の視点」

司会：ジュリー・ブロック、ディスカッション・コーディネーター：清水孝純

- ・13:00 ジュリー・ブロック 「開会の辞」 (20分：含通訳時間)
- ・13:20 フランソワ・ルセルクル「言語の中の異邦人——文化間の他者性、文化内の他者性」
(50分：含通訳時間)
- ・14:10 駒井 稔「甦るドストエフスキー」 (50分：含通訳時間)
- ・15:00 〈休憩 20分〉
- ・15:20 福田裕大「シャルル・クロ受容の問題——
—または「読まれること」の条件についてのいち考察」(50分：含通訳時間)
- ・16:10 ディスカッション「「読まれること」の条件について①」
- ・17:30 終了
〈移動 夕食〉

【けいはんなプラザ会議室 ボルガ】 20:00~22:30

- ・20:00 「メッセージ」(マルク=マチュー・ミュンシュ寄稿によるテキスト読み上げ)
(20分：含通訳時間)
- ・20:20 ディスカッション「読まれること」の条件について②」
- ・22:30 終了

12月3日(土) 【国際高等研究所 216号室】9:30~17:30

二日目「創造の担い手としての受容——文学、詩、音楽、絵画」

午前：「読み手としてのスタンダード」

司会：高木信宏 ディスカッション・コーディネーター：小野潮

- ・09:30 「モラリストの読者としてのスタンダード——その手記の編集について」
(ベアトリス・ディディエ寄稿によるテキスト読み上げ)
(50分：含通訳時間)
- ・10:20 粕谷 雄一「スタンダードのアラビア」 (50分：含通訳時間)
- ・11:10 〈休憩 10分〉
- ・11:20 山本明美「ロラン夫人の『回想録』——スタンダードにとっての創造の鍵」
(50分：含通訳時間)
- ・12:10 ディスカッション「読むことから書くことへ」
- ・12:30 〈昼食〉

午後：「詩、音楽、絵画」

司会：岩本和子、ディスカッション・コーディネーター：松村博史

- ・13:30 「水のなかの酸素——翻訳という奇妙な化学」
(イヴ=マリー・アリュエ寄稿によるテキスト読み上げ) (50分：含通訳時間)
- ・14:20 高木信宏「小林秀雄の『モオツァルト』——象徴派の好敵手、スタンダード」
(50分：含通訳時間)
- ・15:10 CD鑑賞モーツァルト「弦楽5重奏曲第4番 ト短調 K. 516」
- ・15:15 〈休憩 20分〉

- ・ 15:35 小林亜美「スタンダードの小説における絵画的なるものをめぐって—
—描写の問題を中心に」 (50分：含通訳時間)
- ・ 16:25 ディスカッション「雑種性と生産性——作品の運命1」
- ・ 17:30 終了
〈移動 夕食〉

【けいはんなプラザ会議室 ボルガ】 20：00～22：30

- ・ 20:00 ディスカッション「雑種性と生産性——作品の運命2」
- ・ 22:30 終了

12月4日（日） 【けいはんなプラザ会議室 ボルガ】 9：30～12：30

三日目「総括と展望」

司会：福田裕大、ディスカッション・コーディネーター：相澤信依

- ・ 09:30 ジュリー・ブロック「『武蔵野夫人』の受容について——ふたつの「合評」をめぐる考察」
(50分：含通訳時間)
- ・ 10:20 ラウンド・テーブル「議論の総括」
(120分：含通訳時間)
- ・ 12:00 比較研究からみた「生の作用」理論
- ・ 12:30 終了